

明治維新 150 年に思う

西 羽 晃

明けましておめでとうございます。

2018（平成 30）年は明治維新（1868 年）から 150 年ということで、政府は大々的なキャンペーンを展開している。明治維新こそが近代日本の始まりだと強調し、明治維新の精神に学べと言っている。

しかし、明治維新を推進した明治政府は欺瞞に満ち、武力を第一とする政府だと私は考えている。当時の桑名藩は明治政府に対抗したが、力でねじ伏せられた。

幕末には幕府を倒そうとする勢力が尊皇攘夷を叫んだ。その最先鋒が長州藩であった。1864（元治元）年長州藩は武力で天皇を脅かし、御所に大砲を打ち込んだ。いわゆる禁門（蛤御門）の変である。これに対して御所を守った主力は薩摩藩、会津藩、桑名藩であった。長州藩は撃退され、天皇に手向かったので、賊軍と言われた。一方、薩摩・会津・桑名は官軍と言われた。その後、薩摩は豹変し、長州と手を結び、討幕へ方針転換してしまった。会津・桑名は裏切られてしまった。

将軍徳川慶喜も江戸幕府の体制では、諸外国からの攻勢に対抗できないと考え、1867（慶応 3）年に大政奉還をして政権を天皇へ返上し、話し合いによって、新しい政権の樹立を目指した。桑名藩も同じ考えである。しかし、薩長は話し合いでなく、武力で幕府を倒すことにした。そして 1868 年 1 月から武力攻撃である戊辰戦争を始めた。この戦争で桑名藩の地元である桑名城は戦わずして敗北したが、藩主の松平定敬は最後の函館まで抵抗を続けた。桑名藩は天皇に対抗したわけではなく、薩長軍に対抗したのである。しかし薩摩・長州軍は官軍となり、桑名藩は賊軍と言われるようになった。

歴史は勝者を中心とした歴史が大声で語られ、敗者は悪者にされがちであるが、江戸時代の封建制は地方分権であり、地域の住民に密着した施策がなされていた。「百姓は絞れるだけ絞り取れ」とは江戸時代を悪く言うため明治になってから言われた。百姓が疲弊しては大名も収入が減ってしまうのであって、きめ細かな救済がなされていた。

明治維新の精神は富国強兵であり、その精神は太平洋戦争の敗戦で失われたかと思われたが、今も脈々と続いている。その精神を次世代へ受け継ごうとしているのが、現政権の基本的な考えであろうと私は

思っている。

明治 20 年に桑名城跡に「戊辰殉難招魂碑」が建てられた。その碑文は松平定敬撰並に書である。「忠哉義哉、桑名士民、守節取義、各殉其難」とある。桑名藩の武士・藩民は節義を守り通したことを書いている。その裏には節義のない薩長が樹立した明治政府への痛烈な批判が秘められていると私は思っている。その碑は今も鎮国守国神社の境内にある旧天守台に建っている。

